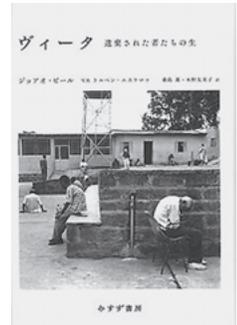


◆書評◆

ジョアオ・ビール著 トルベン・エスケロウ写真
桑島薫／水野友美子訳

『ヴィータ 遺棄された者たちの生』

(みすず書房 2019年 ISBN 978-4-622-08786-1 5000円)



洲崎 圭子

(お茶の水女子大学 基幹研究院
サンパウロ総合大学)

ラテン語で「生」を意味するヴィータ VITA は、ブラジル南部の人口 140 万人都市、ポルト・アレグレ市にある保護施設の名称である。本書の書評の依頼を受けたときサンパウロに滞在中であった評者は、地球を半周して本書が届くまでの間、飛行機で一時間半程度の比較的安全とされている同市を訪れてみたいと気軽に考えていた。だが、それはまったくの不見識であったと、本書を手にして表紙の写真を見たときに即刻猛省を迫られることとなった。コンクリート造りの建物の中庭に、入所者らしき十数人が写り込むその写真のなかでは、3 人を除いて全員が椅子や地面に所在ない様子で座り込んでいた。ヴィータは、貧困の果てに社会から遺棄され、「不要品」とみなされた人々が置き去りにされる施設であった。このヴィータで精神異常者というレッテルを貼付され、自らの存在が抹消されてしまうという状況にあくまでも抵抗していた一人の女性入所者が、カタリナだっ

た。著者は、カタリナを中心にフィールドワークを行った成果から、ある人間が、誤診や過剰投薬などにより精神病患者に仕立てあげられていった過程をつまびらかにし、無価値とされた人間を「社会的な死」へと追いやる社会のありようを浮かび上がらせている。

本書は、2013 年に、カリフォルニア大学出版局から刊行された João Biehl, Photographs by Torben Eskerod, *VITA: Life in a Zone of Social Abandonment*, updated with a New Afterword and Photo Essay の全訳である。2005 年に出版された初版の内容に加え、「あとがき」と新版の謝辞、さらには 2011 年当時のヴィータの写真が掲載されている。ブラジル生まれの文化人類学者である著者は、ヴィータが位置するポルト・アレグレ市で育ち、神学とジャーナリズムを修めたのち博士号を米国で取得後、南北アメリカ大陸を往来し、本書を英語で執筆した。デンマーク人写真家トルベン・

エスケロウも目を背け、撮るのを躊躇したとされるヴィータの日常を切り取った写真が随所に差し挟まれ、本文の記述と相俟って、苛酷な現実が緊張感を伴って示される。1995年から足掛け10年以上にわたり展開されたフィールドワークの結実としての「民族誌」である本書は、社会から遺棄された一人の女性と、人類学者である著者との人間的交流の証左の記録でもある。六部構成の本書は、第一部から第五部までは時系列に沿って記述され、著者のフィールドワークの進展が追える形になっている。以下、本書の概要と主要な論点を紹介する。

本書の「はじめに」の部分では、中心的に論じられることとなる女性カタリナとの出会いのいきさつと、ヴィータの概要についての説明がなされるなかで、今の時代、人間であるとは何を意味するのかという本書の中心的な問いが示される。

第一部ではまず、1980年代から90年代にかけて、医療が国民の権利となり貧困層にも薬や最低限の医療にアクセスが可能となるものの、ポルト・アレグレ市を州都とするリオグランデ・ド・スール州では周辺地域からの移住者が集中し失業者数が増大したことから、ヴィータのような施設が容認されるようになった社会的背景が述べられる。新自由主義経済のもと、機能不全に陥ったブラジルの公的医療制度と、国家編成の一部としての家族が密接に関係していったことから、生産性がなくなった家族の一員を遺棄するようになる家族のあり方

が指摘される。

第二部では、娘、姉、妻、母、移住者、患者を演じることを強いられてきたカタリナの生い立ちが語られる。著者がカタリナから聞き取ることがらは理解不能の内容も多かったが、彼女が書き溜めていたノートの言葉をきっかけに対話がすすむ。自身の支えとしてきた書き物を、カタリナは「辞書」と呼ぶ。一見して単語の羅列にしか見えないそれらにこそ、彼女の現実が投影されていたと気づいた著者は、カタリナが書き続けられるように新しいノートを手渡す。

第三部では、カタリナが入院した複数の病院のカルテのほか、医師との会話記録、精神科医のメモなどが読者に提示された結果、神経質で母親として不適格だとされた女性が、薬でおとなしくさせられ受動的な存在へと変えられてしまったことが確認される。医療制度改革の結果、入院するか否かは、本人ではなく家族が決定するしくみが出来上がり、家族が、望ましくない家族の一員を追放することが可能となっていた。社会的遺棄の多くが、歴史的に固定化されてきた男女間の関係に基づいた世帯内の権力関係に拠っていたことに著者は改めて衝撃を受ける。

第四部では、カタリナの元夫や義理の両親、親族たちへのインタビューにより構成され、家族のなかで彼女が無用な存在として排除されるしかなかった状況が明らかにされる。続く第五部では、カタリナの兄弟たちが彼女と同じような症状を呈するよう

になったことから、カタリナが精神病ではなく遺伝性の難病にかかっていたことが判明する。

圧巻は「辞書」と題された第六部であり、ここでは、カタリナが書き溜めた19冊のノートから抜粋された単語や短文の数々が提示される。脈絡を欠いていた単語の羅列が、調査を進めるなかで意味を持ち、あたかも自由詩さながらの「作品」の様相を呈することとなる。それら言葉の各々に、自身が社会から抹消されることを拒むカタリナの強烈的な願望があふれている。

640ページを超える大著である本書の意義はまず、過当な市場競争がなされた結果、国家が福祉分野から撤退するなかで、国家に代わって医療の担い手となってケアを供給し、ときにケアの対象を選別することになる家族という「国家内国家」が出現したことで、市場において価値のない者が排除され、役に立つ人間とそうでないとみなされた人間の振り分けが家族内でなされるようになった社会福祉制度の脆弱さを突いたことである。一人の女性を中心とした調査を行うことを通じ、現代ブラジルが抱える政治、医療、家族制度に関する社会構造の問題を顕在化させていく手法は鮮やかである。第二の意義は、ブラジルで行わ

れているヴィータのような施設への社会的遺棄の多くのケースには、ジェンダー・バイアスが多分に作用している点を指摘したことにある。男性ならば、家族の支えを得て就業不能給付金を受給することも可能であるが、病気を理由に棄てられる多くが女性であることから、女性の身体にまつわる伝統的な権力構造が浮き彫りにされる。

しかし、これらはブラジルに限って起きているのではない。貧富の差が広がり弱者が置き去りにされる状況を呈しつつある現代日本においても起っている。家族に過渡的な負荷がかかる介護問題に耳目が集まるものがそれを示しているといえるだろうか。さらには、評者が当稿を執筆中、未知の感染症が全世界に蔓延し、人類は、未曾有の局面に立たされている。ウイルスは、国境や封鎖といった人為的に引かれた境界を難なく乗り越えた結果、限られた数の病床を前にした我々に命の選別さえ迫る事態となっている。人が人であること、人間として生きるとはどういうことかという問題を正面から投げかけた本書は、人類学や社会福祉を専門とする研究者や医療・介護の関係者のみならず、今こそ広く多くの人々に読まれるべき一冊である。